櫻井　人口六百万人を擁するチベットは、中国共産党が中華人民共和国を建国して以来、非常な国難に直面してきました。中国共産党の異民族に対する政策は、その民族を、独立国家を形成するネイションとは認めず、少数民族、すなわちエスニック・グループとして扱う不当なものです。彼らは、中国には五十六の少数民族が存在し、チベットも、ウイグルも、モンゴルも、それらの一つに過ぎないと主張して、民族問題を矮小化してきました。

中国共産党の異民族弾圧政策は、一時的に国際社会の批判を浴びることがあっても、基本的には少しも変わらず、弾圧と抑圧、虐殺の度合いは高まる一方です。チベットでは、いま中国共産党の弾圧と抑圧に耐えかね、多くの人々が焼身自殺を遂げています。

二一世紀の国際社会で、このような弾圧に苦しむ人々がいてはなりません。また、私たちがこのような事態を放置してはならないと思います。

中東から始まった民主化運動は、いまや広くユーラシア大陸、そしてアジア諸国へと広がっています。これまで長い間、自分らしく生きたいと切望する人たちは、心ならずも武力と暴力によって押さえ込まれていましたが、いま、その抑圧の壁が崩れつつあります。

そうした情勢のなかで、インドのダラムサラにあるチベット亡命政府にセンゲ首相が誕生し、その首相を日本に迎えることができました。この事実は、非常に意義深いと思います。チベット人が、心より民族として生き、その豊かで深い歴史と文化・文明を踏まえた生き方をすることができる。そうした国際社会をどのようにしてつくっていくことができるのか。今日は共に考えたいと思います。

アジアにおける中国共産党の手法をよくよく見てきた私たちは、中国の戦術が分割統治であることをよく知っています。相手を分裂させて、団結を妨げ、個々に交渉することで、自分たちが優位に立つわけです。しかし、三つの民族それぞれの戦い方および中国共産党との対処のしかたに私たち日本人が介入することはできません。またすべきでもありません。私たちにできることは、それぞれの民族の問題を理解し、その理解の上に立ってできうる最善の協力、支援を行っていくことだと思います。

このシンポジウムが、中国で少数民族と言われ、弾圧に苦しんでいるすべての人々にとって、問題解決の力となること、また日本人の価値観の再生につながり、アジアと世界に範を示すことのできる立派な日本国復活の第一歩となることを願って、討論を始めたいと思います。

田久保　いま国際情勢全体の中で、民族問題の風や自由化の波がどういう文脈の中にあるのかについて、概括的な話をしたいと思います。

悪の根源である中国を考えるうえで、大きな柱が二つあります。

一つめは、ジャスミン革命が中国に波及するかどうかです。

二つめは、中国が、今後、民主主義諸国の価値観である民主、人権、法治を追求していくと、一党独裁を否定せざるを得ないという大変な矛盾に逢着していくのではないかということです。

まず、中東革命、あるいはジャスミン革命と中国のことを話したいと思います。

一昨年の秋、ジャスミンが国花であるチュニジアで、農産物を売っていた青年が、外国人の警官に侮辱を受けたということで、抗議の焼身自殺をしました。この小さな動きが、燃え盛る火のように中東全体へと広まっていったのです。わずか一年の間に、実に四人の独裁者が政権の座を去っています。チュニジア（ベン・アリ大統領)、エジプト（ムバラク大統領)、リビア（カダフィ大佐)、スーダン（バシール大統領）です。

さらに現在の問題はシリアです。シリアは去年三月に小さな動きが始まり、国連の推計では、アサド大統領の弾圧を受けて、八千五百人の人が亡くなったといわれています。ただ、アジア問題研究所にいるシリアの研究員の方から、「逮捕されて牢屋で亡くなった人たちをカウントすると、国連の公式推計の二倍か、三倍います」と言われて、私も愕然としました。シリアがこれからどうなっていくのか。いま、世界中が息をのむような緊張の中で見守っています。

大きく火がついたのは、以上の国々です。こうした動きはサウジアラビア、バーレーン、モロッコ、ナイジェリアにも起こっていますが、各国それぞれの解決方法で、鎮静化させました。しかし、一年間に四人の独裁者があっという間に去ったということは、国際情勢を研究している者でさえ、思いもよらなかったことです。

この動きの中にキーワードがまた二つあると思います。

一つは、シビル・ソサエティ（civil society）が育っていること。シビル・ソサエティを中学校の英語式に訳すと、「市民社会」になりますが、Civil は、文明ですから、単なる市民社会ではなく、「文明度が上がってきた社会」ということです。

もう一つは、インターネットの広がりです。中東の地域では、インターネット人口が、若い人を中心に一気に増えています。いまやツイッターで、「誰々が、抗議の焼身自殺をした」とか、「新聞や通信社は、体制側のＰＲだから信用するな」といったことが瞬時に広がっていきます。

シビル・ソサエティが誕生し、そこに個人間の強力な連絡網ができると、たちまち広場に千人、一万人、十万人という人たちが集まってきて、政権を倒してしまうほどの力を持つということが明らかになったのです。

さて、この動きが中国にどう影響していくのか。ジャスミン革命は、中国に伝わるだろうといわれていました。実際、去年の二月二十二日に、北京、上海など十を超える大都市で反体制の人たちが大規模なジャスミン集会を開こうとしました。ところが、厳戒態勢の中で抑え込まれ、さらに、「ジャスミン」を検索できないよう、インターネットを自動的に遮断してしまったのです。

これは言論や報道の自由を奪う大規模な弾圧だと言わざるをえません。

また、一昨年、ノーベル平和賞を受賞された劉暁波さんは、獄中にあって、オスロの授賞式に行けませんでした。自宅軟禁されていた奥様も同様です。ノーベル平和賞の授賞式では、劉暁波さんの席だけが空いていて、異常な光景でした。

私はこの空席が全世界に投じた発信力は、中国共産党にとっては致命的な打撃になった

のではないかと考えています。

さらに、昨年一月二日に、香港最大の民主派団体「香港市民愛国民主運動支援連合会（支連会)」のトップだった司徒華氏が亡くなり、その追悼式が一月二十七日に行われました。そのとき八千人もの人が参列しています。会場では、参列者によって『ジャスミンの花咲く時』という江沢民の故郷の歌が歌われました。この歌なら、いくらジャスミンという言葉が入っていても、弾圧はできないだろうという狙いだと思います。おそらく、香港の民主派の方々が、「俺たちの声よ、本土に届け」と、歌に託したメッセージを本土に送ったのでしょう。新たに主席に選ばれた李卓人氏が、哀悼の演説の中で、「ジャスミンの花が本土にも開きますように」と言ったら、大変な拍手が沸き起こりました。

こうした事実を通してみると、私は、中国にジャスミン革命が深く浸透し始めているのではないかと思います。

もう一例を挙げますと、広東省の烏坎村という人口一万二千人ほどの小さな村での出来事です。烏坎村の村長が、開発業者に土地の権利を売って、莫大な利益を得るという汚職をしました。この不正に対して村人が立ち上がりました。

省都・広州の党幹部がこの騒動を鎮めるために動き、そのあげく、自由選挙が行われ、新しい村長が選ばれたのです。これは、ごくごく例外かもしれませんが、ジャスミン革命と関連づけられる事象ではないかと思います。

最後に、ミャンマーに触れたいと思います。昨年から、ミャンマーで自由化の波が起こり始めました。そのきっかけになったのは、中国が建設していたミッソンという北部のダムです。昨年の夏、アウン・サン・スー・チーさんなどに、ダムの建設側から、「このダムは環境を大きく壊すうえに、ここで生産した電気の九〇％は中国に持っていかれます」という内容の文書が渡っています。これを知ったミャンマーの知識人が激怒しました。そこで、九月一日にテイン・セイン大統領が、「ミッソンダム共同プロジェクトを、一方的にキャンセルします」という発表をせざるをえなくなったのです。そのとき、これもまたキーワードですが、ミャンマーの「民意を尊重して」と言っています。

この言葉に、アメリカが大変深い関心を持ったであろうと推測できます。むろん、アメリカはその前から、舞台裏での交渉をしていますが、十一月の末から十二月にかけて一挙にことが進み、クリントン国務長官がミャンマーに行きました。そして、「政治犯の釈放」、「北朝鮮との関係を断つ」という二つの条件を、大統領に突きつけています。大統領は、「北朝鮮との関係はストップするが、政治犯は一挙に解放できない」と言いながら、これまでに、ほとんどの政治犯を釈放してしまいました。これはいったい何を意味するのか。ユーラシア大陸で、中国につき従うのは、いまや北朝鮮だけだということです。

民主主義台湾は、馬英九総統に、多少の懸念を持っていますが、基本的には、厳然たる存在感と価値を持つだろうと思います。

ミャンマーの民主化は、こうした大きな文脈のなかで見ていくべきではないかと思います。

この流れは、プーチン率いるロシアにも静かに波及しているのではないか。去年十一月、ロシアの下院で、不正が発覚しました。これに怒った十万人とも、十二万人とも言われる自由を求める人たちがモスクワなどで大規模なデモを行っています。

これを受けて、西側の新聞は、「プーチンが大統領に当選するのは certain、確実だ。しかし、大統領に就任してからは uncertain、不確実なことが起こる。そのことは certain、はっきりしている」という分析をしていました。

もう一つの柱は、中国の目指すところとその価値観に、大変な相克が生じつつあるということです。

ところで、中国が国連の場で何をしているのかも気になります。

二〇一〇年五月、北朝鮮が韓国の哨戒艇を水雷で撃沈して大騒ぎになりました。韓国は国連安保理の非難決議をもらおうとしましたが、中国は断固として反対です。それからしばらくして、延坪島に、北が一方的に砲撃を加えました。韓国とアメリカはこれも国連安保理にかけましたが、中国の反対で、骨抜きになりました。こういうことをしているのが中国です。

さらにイランに対し、イスラエルのネタニヤフ首相が、「アメリカには相談するが、自分の運命は自分の判断で決める」と決意を語っていますから、いま緊張感が走っています。イスラエルがこんなことをせざるをえない理由は、いくら国連決議に持っていっても、ロシアと中国が反対するからです。核開発計画を推進している国を、なぜ助けるようなことをするのか。違和感を抱いて当然だろうと思います。

また、シリアに対する制裁でも、中国は、アサド大統領を退任させることは絶対にやりません。これは、中国が経済的にどんどん外に伸びていって、影響力を及ぼしていくということです。

日本と中国には、尖閣諸島問題がありますが、南シナ海、インド洋でも中国は領海問題を起こしています。ロシアにも、中国人が入っています。

それから、アフリカ、中南米にも、中国が進出しています。これは、何でしょうか。

アメリカの対中政策の基本は、ニクソン以来、「中国を国際社会に引き入れて、エンゲージ、関与させてしまいなさい」というエンゲージメント政策です。エンゲージさせれば、インターナショナルな一つのルールでサッカーの試合をするようになるので、国家も変わっていき、一党独裁体制も自然に消滅し、軟着陸するというのが政策的な姿勢です。ところが、これが危うくなってきました。中国は、積極的にエンゲージしているものの、国家は何も変わっていきません。

アメリカは、大変複雑で戦略的な国ですから、エンゲージメントが握手だとすると、一方にパンチも持っています。これをヘッジング政策と言いますが、これには、三つの要素があります。一番めが、自国の軍事力強化。二番めは、同盟関係の強化。三番めは、友好関係の増加。これによって、相手を締めつけるのです。いつアクションを起こすかはわかりませんが、この二年間、オバマ政権は断固としてパンチのほうを強く出しています。

アメリカが主導する西側の価値観「民主・人権・法治」のおかげで、またエンゲージしたおかげで、中国は経済的に豊かになりました。しかし、これ以上突き進んでいくと、一党独裁を否定しなければならなくなるのではないか。中国が国際国家と言いながら、なぜ北朝鮮、イラン、シリアとくっつかなければならないのかという理由を、二月二十八日付の『ウォールストリートジャーナル』が社説で書きました。

それによると、中国共産党のトップが、中国がこのまま進んでいくと「自由・人権・民主」という価値観に突き当たり、自分たちの政権を否定することになると気づき始めた。その結果アメリカの価値観に反する国々を支持しているのだという分析です。

櫻井　中国が大国になったいま、なぜ北朝鮮やイラン、シリアといった悪い国々とくっつかざるを得ないのか。非常に意味のある分析だったと思います。その悪い国の弾圧を受けてきたのがチベットです。亡命政府ができて、すでに半世紀以上。その亡命政府にいま、若い世代の首相が誕生しました。私たちはセンゲ首相の中に、チベットのチベット人がチベット人として生きる未来を見つめたいと思います。

センゲ　ダライ・ラマ法王が、政治的な権限を委譲すると宣言され、私がその政治を担当することになったとき、「現実的に言って、チベット問題は解決すると思いますか。相手は中国です。中国は台頭する勢力ですよ」と質問されました。

私は、こう答えました。

「世界にとって、中国は新しい国かもしれないが、チベットは数百年も中国と隣接していて、チベット人はそこにずっと住んでいて、中国と渡り合ってきました。これまでもそうでしたし、これからも、そうしていきます」

一九五九年、中国がラサに侵攻したことによって、ダライ・ラマ一四世は、インドに亡命しました。しかし、過去を振り返れば、一九一〇年、中国（清）の破壊行為に耐えきれず、ダライ・ラマ一三世はインドに脱出しましたが、一九一三年に、チベットに帰国しています。そういった歴史もありますから、また同じことができると信じています。ダライ・ラマ一四世は、インドから、必ずチベットに帰国されるでしょう。

チベットの民主主義は本当の意味での民主主義だと思います。そうでなければ、私のようにまったく普通の人間が首相になることはなかったと思います。

私が主席代表に選ばれたのは私の運命、カルマではないかと思っています。

いま、私がどの国へ行くにしても、中国大使館は大変忙しくなります。私が会うかもしれない人に対して、私が訪問する前に、すでに行っていて、会わないように説得したり、私が会った後では、なぜ会ったのかを聞いたりしています。

ですから、私にもプレッシャーはかかります。それでも、私はアメリカに行きました。ヨーロッパでは九つの国を訪問しました。そしてアジアでは日本が初めての訪問国です。皆さん、私に会ってくれました。そして私を受け入れてくれました。

チベットの人々は、占領、弾圧、抑圧を受け入れることができません。だから、焼身自殺という抗議行動をしているのです。最近、三十三人の人が自殺を企て、二十二人は命を

落としました。なぜなのでしょうか。

われわれは生命が貴重だということを知っています。そして、みんな生きたいのです。誰も死にたいなどと思いません。しかし、状況が本当に耐えられなくなったとき、三十三人のチベット人が焼身自殺をして、われわれが苦しみ、支援を求めているというメッセージを世界に向けて送ったのです。

これに対して、国際社会は懸念を表明しています。そして声明を発表しています。そのことは感謝していますが、効果的な支援ということではどうでしょうか。

チベット人の血は、チュニジアの人々の血と同じぐらい暖かく、赤い色をしています。それなのに、あと何人のチベット人が焼身自殺をしなければ、国際社会は注目してくれないのでしょうか。北京が、われわれの主張に理解を示し、政策を変えようと言うまでに、何人の人が死ななければならないのでしょうか。中国政府は、この問題の原因はダライ・ラマ法王にあり、首相の私にあるという言い逃れで責任転嫁をしています。しかし、解決策は北京の手にあるのです。

自殺した人たちはチベット人として、チベット国のために、チベット国民のために命を絶ったのですから、残されたチベット人は連帯を示すことが必要です。失われた命が無駄になってはいけません。亡くなっていった人たちは、すべて、「ダライ・ラマ法王がチベットに戻ることを求める」と言っています。

チベットの人々は、ダライ・ラマ法王に誰もが会いたいと願っているのに、六十年近く会えていません。これがもう一つの要求です。命を賭した三十三人が求めていたのは、ダライ・ラマ法王のチベットへの帰還。そしてチベット人の自由です。

日本は民主化を求めるアジアで主要な役割を果たすことができると思います。なぜなら、日本は神道、仏教、そして民主主義がお互いに共同するものだということを示しているからです。日本の民主主義は成熟して、確固たる根を下ろしています。日本は、世界の多くの国々、とくにアジアの国々にとっての模範になっています。

櫻井　チベットの中国へのアプローチは、話し合いを基本としています。ただ、この話し合いはここしばらく行われておらず、中国側が拒否しています。チベットに対する中国の政策をどのように変えることができるのか。中国が一党独裁をつづける限り、変わりようがないように思えますが、話し合いを基本とした中で、どうすれば現状を打開できるのか、展望があれば、お聞かせください。

センゲ　ダライ・ラマ法王の中道政策という考え方は仏教を元にしていますが、非常に現実的な方策であると考えています。

私たちは、二〇〇二年以来、中国政府と九回の対話を重ねてきました。対話は二〇一〇年の一月まで続きましたが、それ以来、正式な対話は行われていません。

対話が途切れている近年、中国側の対話担当者は、世界各地を飛び回り、ダライ・ラマ法王やチベット政権の悪口を言いふらしています。また、中国政府は常に、「チベット問題は内政だから、干渉されるべきではない」と言っています。

そこで、日本をはじめ理解のある方々と国際的な枠組みで対話することが望まれるわけです。私たちは非暴力ですから、対話でしか進むことができないのです。中国政府が政策を変えない限り、現在の手詰まり状態はつづかざるを得ないと思います。

櫻井　チベットの現状は、モンゴルのこれまでの歴史、ウイグルのこれまでの歴史とまったく重なると思います。その特徴は、ウイグルの人も、モンゴルの人も、チベットの人も、みんな中国式に教育されて、心が中国人にならされていく。もう一つは、そのそれぞれの民族の、一番上の優れたリーダーたちを、中国側が中国化して取り込む、もしくは弾圧して殺してしまう。そうして、それぞれの民族の力を削ぎ落とすことです。これに対して亡命政府は、どう対処する考えでしょうか。

センゲ　中国は、チベット、モンゴル、ウイグルなど、さまざまな少数民族に関して、同化政策を掲げています。一つは、十二歳、十四歳ぐらいの学生を中国で教育するということです。さらに、大学、中学、高校、そして小学校レベルにおいて、中国語による授業をしています。中国語で教育することによって、中国人化していくのです。

また、中国人移民がどんどん流入しています。満州地方では、満州人一人に対して九人の中国人が入っています。モンゴルでも、八対二ぐらいで中国人が移民として入ってきているということです。そして、ウイグルでは、中国が六、ウイグル四ということです。チベットの大都市では中国人の移民が大多数ですが、十一月、十二月といった寒期には、あまりの寒さに多くは、中国に戻ってしまいます。夏は中国人が都市部で大多数になる状況ですが、冬期には中国人が少なくなるのです。

地球温暖化によってチベットが暖かくなってしまうと、中国移民が長期間にわたって居座ってしまいますから、チベットはずっと寒冷であってほしいと思います。

チベットの主要な僧院は、すべて文化大革命で破壊されてしまいましたが、亡命政権は、ネパール、ブータン、インドで僧院、尼僧院を再建しましたので、三万人以上の亡命僧侶、尼僧を教育しています。

また新しい政策として、チベットの難民に英語による教育と、初等、中等では、チベット言語も追加するということがあります。母国語で教育されたほうが、教育効果があるということは科学的に実証されています。高等教育では、英語教育を、亡命学校でいまやっています。英語教育に加えてチベット言語による母国語教育ということです。つまり、バイリンガル教育です。

科学的そして伝統的な教育をいま広げていますが、私は伝統と近代の両方を重視していかなければならないと思っています。われわれは近代化しなくてはならない。しかし、伝統を尊重しなくてはならない。そのために、たゆまない努力をつづけています。

櫻井　教育の話が出ましたが、教育、外交など、チベット亡命政府の予算を紹介すると、年間予算は二千二百万ドルで、一ドル八十円で換算して、わずか十七億六千万円です。この予算で、十二の国々に代表事務所を置き、内外で教師を含む二千人の公務員に給料を払って、インド、ネパール、ブータンに住んでいる十二万人の亡命チベット人の支援をして

います。首相の給料は、三百六十七ドル、三万円弱です。

チベットの大きな柱は、チベット仏教です。次のダライ・ラマ法王をどのようにして選ぶのか。いま私たちは若い首相を目の前にして、チベット亡命政府の政治は、この線でつづいていくだろうと思いますが、仏教はどうなるのかという疑問はみんなが持っていると思います。

センゲ　われわれは、いまの予算の中で、十二万人の難民の面倒を見て、七千ぐらいの学校を運営しています。また、多くの病院、クリニック、さらに幼稚園なども運営しています。奨学金も出していますし、たくさんの僧院も管理しています。これら全部を、二千二百万ドルの予算の中でまかなっているのです。質素な暮らしをしながら、非常に効率的に予算を使っています。

次のダライ・ラマ法王は中国政府が選ぶと言っていますが、ダライ・ラマ法王は昨年の九月に発表した声明の中で、ダライ・ラマ一五世の生まれ変わりは、いくつかの方法で実現できると言っています。一つは、生まれ変わる。つまり、前代のダライ・ラマが亡くなってから、別の体に宿るということになります。もう一つは、エマネーションという言葉がありますが、これは魂が移るということです。あと一つは、ローマ法王を選ぶような形ですが、多くの高僧が集まって、会議で議論して、次のダライ・ラマを選ぶという方法です。

ダライ・ラマ法王がいま考えていることは、現ダライ・ラマが次のダライ・ラマを選ぶ権限を持つということです。彼は九十歳になったら、選ぶと言っています。

法王は、去年、政治的権限をすべて委譲しました。その意味では、法王の政治的権限が生まれ変わったということです。この権限委譲が、うまく軌道に乗ったら、次のステップとして、総合的な権限委譲を考えるのではないかと思います。中国政府に対して、次の一人だけにすべてを委譲するのではなく、宗教的な生まれ変わりと政治的な生まれ変わり、二人の人物に権限を委譲することによって、中国がより困るのではないかと思います。

私が第一ステップの責任を担っています。そこで、私は政治的権限委譲がうまくいったということを、証明しなければなりません。だからこそ、私は多くの世界の人たちの前で話して、一生懸命働かなければいけません。

そうすることによって、われわれは、北京に明確なメッセージを送れるのだと思います。自由はつぶされるものではない。民主主義も信教の自由もつぶされるものではないということです。

櫻井　ミャンマーでアウン・サン・スー・チーさんが圧勝して、これから民主化が進みます。ミャンマーとチベットは、もともと同じ民族から派生して、民族同士の血のつながりは非常に濃い関係です。ミャンマーの民主化がチベットにどのような影響を与えるか。そこから先、ウイグル、モンゴルにどのような影響を与えるのでしょうか。

田久保　ミャンマーのダムは、チベット側から流れている水です。ビルマ人の母なる川でしょう。インドのアルナチャル・プラデシュ州で、インドと中国は、領有権の紛争を抱え

ています。これもチベット側から流れる川です。この源流を中国に止められますと、インドの生命である水がおかしくなってしまいます。チベットとウイグル、モンゴルもそうですが、水がつなげているように、チベットからいろいろ有形、無形な関係が出てきていると思います。ここで共通しているのは、やはり反中国ではないでしょうか。

ミャンマーだけではなく、世界でまったく通用しない不法者国家グループの中国に対する「揮発性の」と言っていい反感がワーッと広がっています。これに誰かが火をつけると、一気に燃え上がるのではないかと考えています。チベットの現状は、人的犠牲とともに、歴史、伝統、文化の抹殺に対して反抗しています。これは良心ある国家あるいは人々の胸を打たないわけにはいきません。

櫻井　田久保さんが「揮発性」と言いました。私たちはこの「揮発性のもの」に火をつけることができるかどうか。いま問われているのだろうと思います。

私たちの住んでいる国際社会は、価値観によって大きく二つに分かれています。中国、ロシア、シリア、イラン、北朝鮮のように人々を弾圧して、そして民主主義を否定して、人間の根源的な欲求である自由を否定する国々と、そうではない国々。この価値観を軸とした戦いは、決してなくなりません。なぜなら、人間は自由を欲する存在だからです。

二〇一二年、私たちは非常に重要なところに立っていて、その重要なところに立っていると認識するかどうかによって、世の中は変わってくると思います。このフロアに中国出身の日本の方がいらっしゃいます。まず、石平さんからコメントをいただいて、その後、劉燕子さんからもいただこうと思います。

石　私はいま日本国籍ですが、漢民族出身者の一人として、この場を借りて、チベットの皆さまにお詫びしたい気持ちです。

われわれの共通の敵は、中国共産党政権ですが、いままでずっと、チベット政府は中国共産党政権に対して、対話という形でやってきました。しかし、あの政権は、対話を通して問題を解決する気が全くないだろうと思います。対話はもちろん大事ですが、対話以上に、チベット人も、われわれ国際社会はもっと包括的な、戦略的な方策も講じなければならないと思います。

果たしてジャスミン革命の火が中国に広がるかどうかということでは、いまはまだ機が熟してないだろうと思います。自由、人権、民主主義を標榜するヨーロッパが、中国に経済的支援を求めているという事実は、中国共産党に、自分たちの独裁政治は強力であるという自信をつけさせています。幸い、いま中国経済は落ちています。これから落ちるところまで落ちてしまえば、中国国内で、民主化を求める群れが派生してきます。

問題は、中国の民主化運動がそのまま中華帝国の解体につながるかどうかです。中華思想と民主化は必ずしも一致していません。ですから、われわれには、これからの戦いが二つあります。一つは、中国共産党政権をどう崩壊させていくのか。もう一つは、中華帝国そのものをどうして解体させるか。恐らくこの二つの課題が解決できたとき、初めてチベット人、モンゴル人、ウイグル人の本当の意味での解放があると思います。

櫻井　中国共産党と漢民族の人々を明確に分けて考えることが大事だと思います。漢民族の中にも、民主化を求め、自由を大事にしている人たちがいます。そこに私は人間としての希望を持っていたいと思っています。その一人が、作家の劉燕子さんです。

劉　漢民族の私は、チベット、ウイグル、モンゴル族の方に対し、この場でとても深い罪悪感に覆われ、気持ちは涙のどん底に落ちています。私たち作家にとって、言論の自由は生命線です。私は、言葉を通じて、チベットの方、ウイグルの方、モンゴルの方々と痛みと悲しみを分かち合えることを願っています。劉暁波さんの話を皆さん、忘れないでください。劉暁波の「漢人に自由がなければ、チベット人には自治はない」という言葉を思い出します。このとき、まさに一文学者として、言葉の尊厳、また漢族人の尊厳、プライドはどこにあるかと問い直すきっかけになります。

首相には、これから抗議焼身自殺以外に、何か実践的、建設的、前向きな方向を探っていただけないでしょうか。烏坎村で、村民自治が実現しています。これにならって、チベットでも、村民の自治から始めることができるのではないかと考えています。

センゲ　なぜチベットが重要なのか、二つ理由があります。まず、最もよく保存されている仏教の文明、そして経文がチベットにあります。ですから、これを破壊することがあってはなりません。そして、古い文明の一つがチベット文明です。さらに、一番古い言語の一つが、チベット語です。

また、環境的には、北極、南極に加えて三番目に大きな氷があるところで、チベットは三極と呼ばれています。これがほとんどの川の水源になっていて、インドからパキスタン、ビルマ、バングラデシュに流れています。メコン川は、タイ、ラオス、カンボジアに流れています。揚子江そして黄河は中国の文明の源ですが、いずれも水の源はチベットです。いま、水が白金と呼ばれています。古くは土地を巡っての戦いでしたが、次にエネルギーを求めての戦争に移り、いまは水を争う戦争になっています。チベットは南アジア全体、その他の国の水の源になっていますので、ここの水は非常に貴重です。

チベット大地ということで、伝統的に、自然な水の流れを尊重してきましたし、水を共有することを尊重していました。しかし、現在、中国政府と企業がダムを造っています。一つ、二つではなく、二十ものダムをチベットの川に造っているのです。

チベットは環境的に重要ですし、文明的にも重要ですし、政治的にも重要です。

過去五十年の間、亡命政権は、非暴力、そして民主主義に投資をしてきました。私は民主主義を主張して、引きつづき非暴力に力を入れていきます。非暴力、そして民主主義は、われわれの中核的な原則だからです。チベットの運動は、民主化のうねりの一部分です。そしてアジアの自由の一部分であり、世界の自由の一部分です。

一九八二年の中国憲法第四条によれば、中国では特別行政区をつくることができます。その法に基づいて、香港が一国二制度のシステムをつくり、自治をしています。なぜチベットができないのでしょうか。

中国は、「香港は英国のシステムのもとにあった別の法制度があり、商業的なシステムが

あって、チベットとは違うのだ」と言います。それなら、マカオはどうでしょう。マカオは英国の商業的なシステムもないし、法制度も持っていません。マカオは犯罪人が中国から行ってつくったのです。マカオが、なぜ一国二制度を認められるのかと反論できます。

いま中国政府は、台湾の人々も違うと言っています。もっと自治を与える。あるいは現状を、台湾には認めると言っているのです。ということは、自治を認めることができるのです。香港を認め、マカオにも自治を与えた。そして台湾に関しても認める用意があるのです。となると、問題は、チベットにはなぜ与えないのかです。これが根本的な問いなのです。

中国政府から見たとき、香港の人は中国人です。そして台湾の人も、やはり中国人です。しかし、台湾の人は、自分たちは台湾人であって、中国人ではないと言っています。しかし中国政府から見たときは、台湾人も中国人なのです。ということは、中国政府は、中国人には自治与え、チベット人には与えないという立場です。ですから、これは民族問題、人種問題でもあります。広東州の烏坎村は抗議をしました。それで、烏坎村で村民の一人を、村長として選びました。選挙で指導者が選ばれたのです。平和的にやってきたということで、政府はその村に関しては認めたのです。ところが、平和的な抗議がチベットで起こったときには、銃殺されました。

一月二十四日、二十五日、中国の春節のときに、何百人ものチベット人がデモをしました。そして八人が射殺されました。平和的な抗議行動に参加しただけで銃殺されたのです。焼身自殺以外の方法はないのかという質問がありましたが、チベット人は焼身自殺に代わる方法がほしいのです。しかし、中国政府は、ハンストをしても殺します。デモを行えば、拷問を受けて、殺され、ポスターを貼っただけで銃殺されることもあります。

だから、平和的なデモをやって射殺されるより、同じ死ぬのなら、焼身自殺をしよう。焼身自殺をして、われわれはこんな苦しみを受けているのだというアピールをしようということです。チベット人は悲劇的な抗議方法ということで、焼身自殺を選択して、人々の注目を喚起しているのです。

現実と理論の間に大きな乖離があります。これが、絶望的な現実の叫びで、それ以外に余地がないということです。

島田洋一企画委員　インド政府が亡命政府の存在を許してきたというのは、立派なことだと思いますが、インド政府と中国との関係が、現在および今後どうなっていくと考えていますか。

センゲ　インド・中国の関係は非常に複雑です。どこの国でも対中国関係は複雑になります。六二年には、インド・中国において国境問題がありました。チベット人民に関しては、インドは非常に寛大に迎え入れてくれました。寛大度の高い国です。私どもの亡命政権はインドにありますし、亡命人民もたくさん居住しています。このような支援がこれからもつづくと考えています。チベット人民に対するインド国の対応、待遇は変わらないと信じています。

会場からの質問　日本政府に今後希望したいこと、求めることは具体的に何なのか。あと、中道のまま非暴力を貫いた独立を訴えていく方針はつづけるのでしょうか。

センゲ　中道政策は、チベット政権の政策の一環であることは、いまでも変わりません。非暴力が功を奏した前例もあります。

日本政府に期待することですが、私はどこに行っても、同じことを申し上げています。私は感謝しています。出会いということに感謝しています。会ってくださるということに感謝しているのです。

質問　チベットは、日本人はあまり知りません。モンゴルと言えば、朝青龍など、すごく日本で知名度が出て、モンゴルに親しみを感じます。チベットの人も、日本に相撲留学とか、スポーツ留学すれば、これが一番世の中を懐柔しますね。

センゲ　相撲の力士は、チベットにはいません。また、予算の制約がございますので……。

質問　チベットの人も、中国の人も、北朝鮮の人も、イラクの人も、みんな念願していることは、自分の家族の安寧と平和です。それがなぜ争うのか。それはその上に宗教とか、民族とか、国家とか、余計なものがいるからです。人間と人間の交流に力を入れていくと、案外、解決策が出てくるのではないかと考えていますが、どうでしょうか。

センゲ　非常に頭の良い優秀な博士課程レベルの学生がおりますので、日本に喜んで留学させましょう。また文化的なパフォーマンスもあります。中国舞踊とは違う非常にカラフルなチベット舞踊などもあります。喜んで送り込みたいと思います。

伊藤隆理事　一つ感想と、一つ質問をします。感想は、これはチベットだけの問題ではなく、日本の問題でもあるということです。たとえば日本の歴史を考えても、中国によっていろいろ工作が行われ、日本が日本らしくなくなってきています。ですから、尖閣列島だけではなく、沖縄だけではなく、日本全体が危ないのです。中国はどんどん膨張していきます。「インドも取らなければならない」と僕のところへ来ていた留学生は言っていました。

質問は、なぜ自治なのか。歴史上、チベットが漢民族の支配下にあったことはないと思います。そういう民族は、やはり独立なのではないでしょうか。率直な疑問です。

センゲ　ご指摘のとおり、かつてチベットは独立国家でした。チベットが強力な帝国であった時代もあります。そして一九一三年、当時のダライ・ラマが独立宣言したという時代もあるわけです。そして一九五一年五月、十七条の協約が成立し、チベットが中国の一部になっていったということです。

また、国連総会の決議案により、チベット民族には自決権があります。歴史的に、チベットは独立国家であったし、民族の自決権があるということです。しかし、中道政策として、チベットの言語とアイデンティティを堅持するための自治をダライ・ラマが提唱したということです。

櫻井　どうしてチベットが自治しか求められないのか、私も言いたかったのですが、センゲ首相のお答えも非常に現実に即した、政治家として責任あるものだったと思います。

日本人としては、こうした各民族の事情を本当によく理解して、私たちが考える理想の

形を押しつけるのではなく、各民族が考える理想の形を実現できるようにお手伝いし、支援するのが一番いいことだと思います。